

汲古閣珍藏本書目 毛衮編 叢書集成

李賀の集に著録せず。

絳雲樓書目 錢謙益撰 陳景雲注 叢書集成

李長吉詩集五卷

劉須溪批長吉集

吳正子註李長吉集 昌谷集四卷外集一卷

述古堂藏書目 錢曾撰 叢書集成

李賀歌詩編四卷集外詩一卷 二本 宋本影抄

吳正子箋注李長吉詩四卷外集一卷 元抄

李滄葦藏書目 李振宜撰 叢書集成

李賀詩歌四卷併集外詩二本 文冊題跋

文瑞樓藏書目錄 金星軻編 叢書集成

李賀昌谷集四卷 系出鄭王後、七歲能文、為昌黎所知、以父名晉肅、不肯孝進士、終太常協律郎。

年二十七、

芙蓉藏書樓書目 * 一九五八年 古典文学出版社（鳴野山房書目の名で出たが誤り）

昌谷集四卷 唐李賀撰 明曾益註

錦囊留句五卷 唐李賀著

* 明末清初 祁理孫撰

旧山楼書目 「清」趙宗建著 一九五七年 古典文学出版社

昌谷集 一本 (但し、李賀の集か否か不明)

晁氏宝文堂書目 「明」晁璣 一九五七年 古典文学出版社

李長吉集

李賀錦囊集

▲雑記・84V 独吟連歌

1975.6.8.

塚本邦雄氏は李賀の詩的理解において人に劣らぬことを自負する詩人で一九七五年の年賀状に乙卯七赤金星大溪水九宿味爽の十三字を句の上に据えた独吟連歌を記し、各句の擬作者名を玉壺亭・銀箭子 紅花人・碎霜齋・燭籠館・兩行亭・飛閣子・珠帷人・金鳳齋・利衣館・長眉亭・對月子・響環人となづけた。さすが才人の雅遊。あいにく事情あってわたしは年賀を欠礼した。氏の千分の一ぐらいの自負をいだけるようになりたいたのだが、理解も味解も進まぬうちに白髮星星、頑愚笑うべし。

▲雑記・85V 長爪郎

1975.6.8.

一九七四年三月三十日、黄式毅『松客詩』(一九二七)から長爪郎編苦作詩、心肝嘔出忒非直(以嘔血喪生)張船山与舒瓶水、此事従今再語誰(最喜表問陶舒位之詩)Vへ題亡反李懷星疊詩、四首中第二首)を、同じ四月八日八楼成白玉撰文章、召我鬼才長爪郎、手拗梅花供小照、旧情如夢隔寒香V(永富撫松『春及廬詩藁』哭中西秋浦)を写している。李懷星も中西秋浦も未知の人だから何ともしいようはないが、作者についていえば、同じ長爪郎の文字でも黄氏のほうがおさまっている。しかし、いずれにしても、どちらも李賀を引き合いに出さないほうがよかった。

端溪硯 卷一

端州石、唐世已知名。許渾歲暮自公江至新興詩云：「洞丁多斲石，鑿女半淘金。」自注云：「端州斲石。」李嶼青花紫石硯歌云：「端州匠者巧如神。」柳公權論硯亦云：「端谿石爲硯，至妙也。」卷十五にも「端州石」の条があるが、内容は大同小異である。

女称娥 卷二

唐高祖有憶秦娥。娥字見史記齊悼惠王伝：「王太后有愛女，曰修成君，修成君有女，名娥。」後漢順帝、乳母宋娥。又史記外戚世家：「武帝時幸夫人尹嬖好，邢夫人，衆人謂之姪娥。」

如意 卷二

齊高祖賜隱士明僧紹竹根如意，梁武帝賜昭明太子木犀如意，石季倫、王敦皆執鉄如意。三者以竹木鉄爲之，蓋爪杖也。故音義指帰云：「如意者，古之爪杖也。或骨角竹木削作人手指爪，柄可長三尺許。或脊有痒，手所不到，用以搔抓，如人之意。」然秋流以文殊亦執之，豈欲搔痒耶？蓋講僧尙執之，私記節文祝餅于柄，以備忽忘。手執目對，如人之意，凡兩意耳。

先輩之稱 卷二

李肇国史補并唐撫言以孝子互相推稱，則曰先輩，蓋前輩之親也。然南齊書劉懷珍伝曰：「此數子皆宿將旧勳，与太祖比肩爲方伯，年位高下，或爲先輩，而薦誠君側」云云。乃知先輩之稱，南朝以來有矣。

条脱爲臂飾 卷三

唐盧氏雜說：「文宗問宰臣：「糸脱是何物？」宰臣未對，上曰：「真諾言，安妃有金糸脱為臂飾，即金釧也。」又「真諾，萼綴華贈羊權金玉糸脱各一枚。」余按，周處風土記曰：「仲夏造百索繫臂，又有糸達等織組雜物，以相贈遺。」唐徐堅撰初學記，引古詩云：「繞臂双糸達。」然則糸達之為釧，必矣，第以達為脱，不知又何謂也。徐堅所引古詩，乃後漢繁欽定情篇云：「何以致契闊，繞腕双跳脱兩字不同。」

この盧氏雜說の記事を王琦注の唐詩紀事から引き、糸脱は跳脱になっている。

玉樹 卷三

三輔黃圖云：「甘泉宮有槐，根幹盤峙，二三百年物也。即揚雄賦所謂「玉樹青葱」者。」余按，唐劉餗隋唐嘉話謂：「雲陽泉界多漢離宮故地，有似槐而葉細，土人謂之玉樹。」揚子雲甘泉賦云「玉樹青葱」，指此。後左思識之，已失。三輔黃圖以為槐之根幹，則又甚矣。

黃庭博鶴 卷三

蔡條西清詩話謂：「李太白詩有誤，云「山陰道士如相訪，為寫黃庭博白鶴」，逸少所寫乃道德經。」余按，太白集有懷古王右軍詩云：「山陰遇羽客，要此好鶴賓。掃素寫道經，筆精妙入神。書罷籠鶴去，何曾別主人。」據此詩，則太白未嘗誤用。何耶？按，本伝：「逸少聞山陰道士好養鶴，往觀焉。」非山陰道士訪逸少也。前詩不特誤使黃庭事，嘗疑以為世俗子所增。至梅聖俞和宋諫議鶴詩亦云：「不同王逸少，辛苦寫黃庭。」山谷詩云：「頗似山陰寫道經，雖与群鶴不当徂。」則知黃庭之誤尤分明。

前輩以荆公詩：「功謝蕭規慙漢第，恩從隗始詔燕台。」以台字為失。史記云：「為隗改築宮而師事之。」然唐時李太白詩云：「何人為築黃金台」，荆公詩本此。

吳鉤 卷三

沈存中筆談謂：「唐詩多有言吳鉤者，刀名也，刃彎。今南蠻謂之舊党刀。」予按，吳越春秋閻閻內傳曰：「閻閻既寶莫耶之劍，復命于國中作金鉤，令曰：『能為善鉤者，賞之百金。』吳作鉤者甚衆，而有人貪王之重賞也。殺其二子，以血釃金，遂成二鉤，獻于閻閻。吳鉤始于此，豈存中偶忘之耶？左太冲吳都賦云：「吳鉤越棘，純鈞湛盧。」鮑照結客少年場云：「驄馬金絡頭，錦帶佩吳鉤。失意杯酒間，白刃起相仇。」杜甫後出塞云：「少年別有贈，含笑看吳鉤。」又送劉十弟判官云：「經過辨豐劍，意氣逐吳鉤。」李涉寄楊潛云：「腰佩吳鉤佐飛將。」曹唐買劍亦云：「將軍盜價買吳鉤。」韓翃送王相公云：「結束佩吳鉤。」

湘君湘夫人 卷五

樂府敘篇云：「洞庭之山，帝之二女居之。郭璞云：「天帝之女，処江爲神，即列仙傳所謂江妃二女也。」劉向列女傳：「帝與之二女，長曰娥皇，次曰女英，堯以妻舜于媯汭。舜既爲天子，娥皇爲后，女英爲妃。舜死于蒼梧，二妃死于江湘之間，俗謂之湘君。」湘中記曰：「舜二妃，死爲湘水神，故曰湘妃。」韓愈諷陵廟碑曰：「秦博封始皇帝云，湘君者，堯之二女，舜妃者也。劉向、鄭康成亦皆以二妃爲湘君。而離騷九歌，既有湘君，又有湘夫人。王逸以爲湘君者，自其水神；而言湘夫人乃二妃。璞與逸俱失也。堯之長女娥皇，爲舜正妃，故曰君。其次女女英，自宜降曰夫人也。故九歌謂娥皇爲君，女英爲帝子，各以其盛者推言之也。礼有小君，明其正，自得稱君也。」以上皆

樂府敍篇、余嘗考之、若敍篇以郭璞、王逸為失者、甚當。然山海經、列仙伝、湘中記、韓愈碑亦未為得。按禮檀弓曰：「舜葬于蒼梧之野、蓋三妃未之從也。」故康成注曰：「帝嚳立四妃、象后妃四星。其一明者為正妃、餘三小者為次妃、帝嚳因焉。至舜不告而娶、不立正妃、但三妃而、謂之三夫人。離騷所歌湘夫人、舜妃也。夏后氏增以三、三而九、合十二人。春秋說云：天子娶十二。即夏制也。」凡康成之論、本取帝王世紀耳。世紀云：「長妃娥皇無子。次妃女英生商均。次妃舜比生二女、宵明、燭光是也。」乃知康成所注為有揆依。又按秦紀云「死而葬焉」今王逸乃以為溺死、益非矣。諸人皆以為二女、當以檀弓、世紀有三妃為正。

沈 亞 之 を 送 る 歌

1975. 6. 22.

一送沈亞之歌并序（1011 (985)）は、李賀の作品としては中くらいの出来はえだが、制作年次がはっきりしていること、与えた相手の沈亜之との交情がうかがえること、前代詩歌を吸収消化する方法が知られること、などによって重要な作品である。序文はつぎの通り。

文人沈亞之、元和七年、以書不中第、返歸于吳江、吾悲其行、無錢酒以勞、又感沈之勤請乃歌一解以勞之

文人の沈亜之は、元和七年、書学の試験に合格しなかつたので、吳江に帰ることになった。

わたしはその旅を悲しくおもったが、ねぎらう錢も酒もない。また沈君がねんどころに請うの
に感動し、詩の一節を歌ってねぎらった。

文人の「文」を宋蜀本では「丈」と読めるような書き方をしている。丈人とは、祖父・妻の父
などをよぶ称だが、それはたぶん当るまい。妻の父の排行の人をも丈人とよびうるなら、その意
味で沈垂之を丈人といつた可能性はある。しかし底本はじめ他の本はみな「文人」とする。

元和七年は壬辰（八一）で、賀は、わたしのと、て来た説でいうと二十二歳、奉礼郎に任官
した次の年で、長安の崇義里に住んでいたはずである。

沈垂之は、字は下賢。吳興、すなわち今の浙江省太湖畔の吳興の人で、齋藤注は何に拠ったの
か知らないが、その生年を七八一年とし、卒年を八三二年かと推定する。それなら賀より十歳年
長である。「通典」によれば唐代の文官試験の科目に、秀才・明経・進士・明法・明書・明算が
あり、進士科が出世コースで人気があった。垂之は元和十年に進士に及第しているが、七年に受
けたのは明書だったらしい。

同じ太湖畔でも江蘇省に吳江というまちがある。序中にいう「吳江」がそれをさすのか「吳興」
を誤ったのかは確定しようがないが、沈氏は吳地の名族で、吳興にも吳江にもその族人が住んだ。
（拙稿「馮小憐」参照）

吾悲の「吾」は宋蜀本等にはない。勞之の「勞」王注は「送」とし修辭としては勝るかもしれ
ぬ。

一解について鈴木注は「普通には詩篇の一節とか一段とかをさす。此詩は凡そ四解ある。そのと
れかの部分一解を歌うたものかと察する。Vといい、斎藤注は「ただ軽く一つと言ったものであ
ろう。Vという。」

吳興才人怨春風
桃花滿陌千里紅
紫綵竹斷駉馬小
冢住錢塘東復東
白藤交穿織書笈
短策齊款如瓦夾
雄光竄鑿猷春脚
煙底暮波乘一葉
春脚拾材白日下
擲置黃金解龍馬
携笈歸江重入門
勞勞誰是憐君者
吾聞壯夫重心骨
古人三走無摧挫

吳興の才人沈君に 怨のしい 春風
桃の花 まちに滿ち 千里さきまで紅だ
紫の手細はとつたが 竹のむち折れ 馬小さく
冢は錢塘 東の そうだずと東だ
白い藤で織りあげた 書物箱
小型の本を 梵経みたいに きつちりそろえ
かがやかしい宝玉となる鑛石を 試験官に提出しようと
水煙るなか 波こえて 一葉の舟でやってきたのに
試験官は 白昼に 才能を送びとるのに
黄金を煮ててしまつて 龍馬を追放してしまつた
書物箱たすさえて吳江に帰リ また門をはいるとき
いたわるひとは誰だろう 君を愛して
男にとつては 土性骨こそだいいち だとさ
そつ言や 昔の連中も 三度敗れて 挫けなかつた

請君待旦事長鞭　　さあ沈君　朝になつたら　鞭あげて行きたまえ
他日還轅及秋律　　そしてまた　秋には　受験にかえ、てくるんだ

亜之の作品は『沈下賢文集』十二卷（四部叢刊）によつて知ることが出来る。「湘中怨」「異夢記」「秦夢記」の三文は八唐代伝奇文中の白眉（譚正璧）とされ、こんにちではそれのみでかみの名が記憶される傾きにあるが、他の諸文も相当の力量をうかがわせる。詩はわずかに十七首。

虎丘山真娘墓

金釵淪刺墜　　玆地似花台　　油壁何人值　　錢塘度曲哀　　翠餘長染柳　　香重欲薰梅　　但道行雲去
應隨魂夢来

汴州舡行舡岸傍所見

古木暎蒼蒼　　秣林松岸杳　　露珠虫網細　　金縷兔絲長　　秋浪時迴沫　　鷺鱗乍觸航　　蓬煙拈綠線
棘實綴紅囊　　乱穗搖錦尾　　出根掛鳳腸　　聊持一濯足　　誰道比滄浪

のように李賀詩と共通する語彙をもつ作がみられるが、質はかなりおちる。元祐丙寅（一〇八六）十月一日の日付をもつこの集の序文に、

公、諱は亜之、字は下賢、……嘗て韓愈の門に遊び、李賀はその工に情語をなまつくり窈窕の思
いあるを許せり。その後、杜牧・李商隱ともに沈下賢に擬する詩あり。則ち当時、声なまを称す
ること甚だ盛にして、今に存するものは既に尽くは見す。

というのが実情で、秀作の多くは早く散佚したのかもしれない。いずれにしてもかれが「才人」であることは間違いない。

「李給事に与文士を薦むる書」に「ハサキに（元和）五年、臣之、進士を以て入貢し京師に至る」という。同じ年に李賀は進士の試験を受けようとしたのだから、ふたりの交友はこのとき、に始まるのかもしれない。「京兆の試官に与うる書」に「ハ時に亦た人あり、臣之を進士科に勉めしむ。……去年始めて京師に來たり、群士と皆な進められんことを求め、賦するにハ詠を以てし、綺言を琢難し、声において病あり、臣之習うこと未だ熟せず、而して又、文を以て礼部に合せず、先ず黜去せらる。今年また來たり、執事の京兆に主送たるを聞く。V」という。この文の題下に「七年冬作Vと注する。この注が臣之の自注で、あやまりのないものとする。元和六年冬にハ始めて京師（長安）に來Vて落第し七年春に歸郷し、同じ年の冬また來たことになる。すると「李給事に与うる書」のハ五年Vと食い違ふ。あるいはハ五年Vは郷試合格のみをさし、入京は六年だ。たのだろうか。また臣之の書簡によれば、かれの受験科目はいずれの場合もハ進士Vのようである。サキに「明書だつたらしい」と記したのは王琦など注家の説によつたのだが、賀のいう「以書不中第」はあるいは別の解を入れうるのかもしれない。

「家住錢塘東復東」について、鈴木注はハ彼の家は錢塘の東のそのまた東（吳興、湖州）に住居しているのだVと解く。斎藤注はハ錢塘、杭州をしい、またその中の錢塘県をしいが、ここではほんやり浙江省一帯を指したので、正確ではない。湖州は錢塘の北にあたり、東方ではないVという。家住錢塘は斎藤注のいう通りで、東復東は長安から東のまた東といっているの

のだ。呉興は地図上では長安の南東に当るが、交通の便からいへば垂之の「淮南都梁山倉記」に
いうように八汴水は（黄）河より別れて、東、淮に合し、淮水東すれば米帛の関中に輸すべきも
のなり、という東へ東への水路をとるのが早道なのである。

さて、第三句「紫絲竹断駿馬小」に対し、呉正子注以下みな古楽府へ青驄白馬紫絲韁を引く。
『樂府詩集』卷四九に「青驄白馬」と題する次の八曲である

青驄白馬紫絲韁

青驄 白馬 紫たづな

可憐石橋根柏梁

かわい 石橋 根は柏のはし

汝忽千里去無常

おまえ たちまち 千里の向う

願得到頭還故郷

やがて 故郷に 帰っておいで

驚馬可憐著長松

馬をつないで かわいい 松に

遊戯徘徊五湖中

遊びましようよ あちこち 五湖を

箇閨湖中採菱婦

湖で菱とる 姐に 聞くが

蓮子青荷可得否

蓮のさねなら わけておくれか

阿隣白馬高繼駿
著地躑躅多徘徊

かわいい 白馬 たてがみふって
いざとなつたら 足ふみしてさ、

問君可憐六萌車
迎取窃窈西曲娘

かわいい あんたを 六頭立てで
迎えに来ようか 西浦姐あまさ、

問君可憐可都去
何得見君復西帰

かわい あんたが 都へ行って
いつ また 西に 帰って来やる

齊唱可憐使人惑
昼夜懷飲何時忘

ともに歌えは かわいや 惑う
ぬしをおもうて 夜昼なしに

菱とり女と見物の男とのかけあい歌のかたちで、第一は女から男にいどみ、第二は男から女へというふうに一曲ずつ交代で第七曲まで進み、第八曲の第一句は男、第二句は女のことばだが、それを男女で斉唱するのである。

「青鞥白馬」は清商曲辞の西曲歌の一つで、舞辭であり、『古今楽録』によれば、もとは十六人で舞ったが梁時には八人となったという。

この歌はかけあいだから、からかひやひにくの切れ味を見せるのが主だ。それを李賀はとって

キマしみじみした送詩にしているのだ。

紫絲竹断駉馬小に青驄白馬紫絲驪が投影していることは、すでに注家がいった。家住錢塘東復
康や他日還轅及秋律には何得見君復西帰の変貌が見られる。煙底鷺波乗一葉はたぶん遊戯徘徊五
湖中を鍛えて全く別のものにしたものだ。

別のものにはしているが、「これは君の教えてくれた『青驄白馬』の換文歌だ。こんど君が帰
ってきたらほんものの『青驄白馬』をうたって、また一杯やろう」と、しめりがちな沈亜之の心
を、いたすら、ぼい明るさに引きよせようとするやさしさもこめてある。

換文歌には、さまざまの效用がある。李賀が樂府の名手といわれるのは、その效用に精通した
ことも当然含まれていたはずである。賀の詭怪をいう人は多いが、そのやさしさや、軽みや、を
いう人のあまりないのはふしぎである。

沈亜之は元和五年（これはさきに記したように問題がないではないが）長安に来て、李賀と同
様、進士の試験を受けようとしたのであろう。諱事件によって賀は受験を断念したが、亜之は落
第したのであろう。

雪下桂花稀

雪ふりて木犀まれに

啼鳥被暉歸

鳥うたれ啼きつつ帰る

關水乘驪影

水の面の驪馬に乘る影

秦風帽帶垂

都の風に帽の帯垂る